

第 76 回身心変容技法研究会「身心変容技法としての詩歌謡」 2019 年 11 月 12 日 鎌田東二

1、問題設定～身心変容技法としての詩歌謡

「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる知恵と諸技法（ワザ）」を指す。私の住む比叡山の伝統的修行の「千日回峰行」も日本的身心変容技法の代表的な技法である。「千日回峰行」は、天台密教の主尊である大日如来のエージェントたる不動明王と一心同体化して、「生身の不動明王」と化すことであり、『法華経』に説かれている常不軽菩薩になり切ることでもある。そうした身心変容技法には、マインドフルネス瞑想や、密教瞑想、観想、止観、念仏、禅、題目、修験道の奥駆けや峰入り、滝行、合気道や気功や太極拳などの各種武道・芸道等々、さまざまなワザがあるが、ここでは「詩歌謡」をそれらの一つとして取り上げてみる。

①詩～1) 文学の形式の一。一定の韻律などを有し、美的感動を凝縮して表現したもの。内容的にはギリシヤ以来抒情詩・叙事詩・劇詩に大別され、近代にはいつて定型を廃した自由詩・散文詩が盛んとなった。2) 人の心に訴え、心を清める作用をもつもの。また、詩的趣があるさま。3) (和歌・俳句に対して) 漢詩のこと。(大辞林)

②歌～1) 拍子と節をつけて歌う言葉の総称。また、それを歌うこと。神楽歌・催馬楽・今様から、現今の唱歌・民謡・歌謡曲などまで種類が多い。2) 一定の音節数によって語の調子を整えた感情の表現。長歌・短歌・旋頭歌や近代詩などの総称。3) (歌) 和歌。特に、短歌をさしている。(大辞泉)

③謡～能楽の詞章、およびそれに曲節をつけたもの。また、それを謡うこと。(大辞林)

2、宮沢賢治の童話「龍と詩人」に描かれた「詩人」の詩作法～芸術家の原像「龍と詩人」

①「老竜の歌をぬすみ聞いてうたう」

②詩は自然の流動との感応から生まれる。

「風がうたい雲が応じ波が鳴らすそのうたをただちにうたう、星がそうなるうと思ひ陸地がそういう形をとろうと覚悟する、あしたの世界に叶うべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなわしむる予言者、設計者」

龍のチャーナタは洞のなかへさして来る上げ潮からからだをうねり出した。

洞の隙間から朝日がきらきら射して来て水底の岩の凹凸をはっきり陰影で浮き出させ、またその岩につくたくさんの赤や白の動物を写し出した。

チャーナタはうっとりその青くすこし朧ろな水を見た。それから洞のすきまを通して火のようにきらきら光る海の水と浅黄いろの天末にかかる火球日天子の座を見た。

(おれはその幾千由旬の海を自由に潜ぎ、その清いそらを絶え絶え息して黒雲を巻きながら翔けれるのだ。それだのにおれはここを出て行けない。この洞の外の海に通ずる隙間は辛く外をのぞくことができるに過ぎぬ。)

(聖竜王、聖竜王。わたくしの罪を許しわたくしの呪をお解きください。)

チャーナタはかなしくまた洞のなかをふりかえり見た。そのとき日光の柱は水のなかの尾鱗に射して青くまた白くざらざら反射した。そのとき竜は洞の外で人の若々しい声が呼ぶのを聴いた。竜は外をのぞいた。

(敬うべき老いた竜チャーナタよ。朝日の力をかりてわたしはおまえに許しを乞いに来た。)

瓔珞をかざり黄金の大刀をはいた一人の立派な青年が外の畳石の青い苔にすわっていた。

(何を許せというのか。)

(竜よ。昨日の誌賦の競いの会に、わたしも出て歌った。そしてみんなは大へんわたしをほめた。)

いちばん偉い詩人のアルタは座を下りて来て、わたしを礼してじぶんの高い座にのぼせ〔二字空白〕の草蔓をわたしに被せて、わたしを賞める四句の偈をうたい、じぶんは遠く東の方の雪ある山の麓に去った。わたしは車にのせられてわたくしのうたった歌のうつくしさに酒のように酔いみんなのほめることばや、わたしを埋める花の雨にわれを忘れて胸を鳴らしていたが、夜更けてわたしは長者のルダスの家を辞してきらきらした草の露を踏みながらわたしの貧しい母親のもとに戻るとき月天子の座に瑠璃の雲がかかりくらくらしたのでわたくしがそれをふり仰いでいたら、誰かミルダの森で斯うひそひそ語っているのを聞いた。

(わかもののスールダッタは洞に封ぜられているチャーナタ老竜の歌をぬすみ聞いてそれを今日歌の競べにうたい古い詩人のアルタを東の国に去らせた)

わたしはどういうわけか足がふるえて思うように歩けなかった。そして昨夜一ばんそこらの草はらに座って悶

えた。考えて見るとわたしはここにおまへの居るのを知らないでこの洞穴のま上の岬に毎日座り考え歌いつかれては眠った。そしてあのうたはある雲くらい風の日のひるまのまどろみのなかで聞いたような気がする。そこで老いたる竜のチャーナタよ。わたくしはあしたから灰をかぶって街の広場に座りおまえとみんなにわびようと思う。あのうつくしい歌を歌った尊ぶべきわが師の竜よ。おまえはわたしを許すだろうか。）

(東へ去った詩人のアルタは

どういう偈でおまえをほめたろう)

(わたしはあまりのことに心が乱れてあの気高い韻を覚えなかった。けれども多分は

風がうたい雲が応じ波が鳴らすそのうたをただちにうたうスールダッタ

**星がそうなろうと思ひ陸地がそういう形をとろうと覚悟する
あしたの世界に叶うべきまことと美との模型をつくりやがて
は世界をこれにかなわしむる予言者、**

設計者スールダッタ、と、こういうことであつたと思う)

(尊敬すべき詩人アルタに幸あれ、

スールダッタよ、あのうたこそはわたしのうたでひとしくおまへのうたである。いったいわたしはこの洞に居てうたつたのであるか考えたのであるか。おまへはこの洞の上においてそれを聞いたのであるか考えたのであるか。おおスールダッタ。

そのときわたしは雲であり風であつた、そしておまえも雲であり風であつた。詩人アルタがもしそのときに冥想すれば恐らく同じうたをうたつたであろう。けれどもスールダッタよ。アルタの語とおまへの語はひとしくなくおまへの語とわたしの語はひとしくない韻も恐らくそうである。この故にこそあの歌こそはおまへのうたでまたわれわれの雲と風とを御する分のその精神のうたである。)

(おお竜よ。そんならわたしは許されたのか。)

(誰が許して誰が許されるのであろう。われらがひとしく風でまた雲で水であるというのに。スールダッタよ、もしわたくしが外に出ることができおまえが恐れぬならばわたしはおまえを抱きまた撫したいのであるがいまはそれができないのでわたしはわたしの小さな贈物をだけしよう。ここに手をのばせ。) 竜は一つの小さな赤い珠を吐いた。そのなかで幾億の火を燃した。(その珠は埋もれた諸経をたずねに海にはいるとき捧げるのである)

スールダッタはひざまずいてそれを受けて竜に云った。(おお竜よ、それをどんなにわたしは久しくねがっていたか わたしは何と謝していいかを知らぬ。力ある竜よ。なに故窟を出でぬのであるか。)

(スールダッタよ。わたしは千年の昔はじめて風と雲とを得たとき己の力を試みるために人々の不幸を来したために竜王の〔数文字空白〕から十万年この窟に封ぜられて陸と水との境を見張らせられたのだ。わたしは日々ここに居て罪を悔い王に謝する。)

(おお竜よ。わたしはわたしの母に侍し、母が首尾よく天に生れたらばすぐに海に入って大経を探ろうと思う。おまえはその日までこの窟に待つであろうか。)

(おお、人の千年は竜にはわずかに十日に過ぎぬ。)

(さらばその日まで竜よ珠を蔵せ。わたしは来れる日ごとにここに来てそらを見水を見雲をながめ新らしい世界の造営の方針をおまえと語り合おうと思う。)

(おお、老いたる竜の何たる悦びであろう。)

(さらばよ。)

(さらば)

スールダッタは心あかるく岩をふんで去った。

竜のチャーナタは洞の奥の深い水にからだを潜めてしづかに懺悔の偈をととなえはじめた。

3、「詩人」の存在意義

「詩人は長期間の、破壊的で計算された錯乱によってヴォワイヤン見者になる」(アルチュール・ランボー「見者の手紙」1871年)

「詩はただ病める魂の所有者と孤独者との寂しい慰めである。」「詩の表現の目的は単に情調のための情調を表現することではない。幻覚のための幻覚を描くことでもない。同時にまたある種の思想を宣伝演繹することのためでもない。詩の本来の目的は寧ろそれらの者を通じて、人心の内部に顫動する所の感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかんに流露させることである。」「詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である。」「詩は言葉以上の言葉である。」「詩は一瞬間に於ける靈智の産物である。」(萩原朔太郎『月に吠える』序)

「詩人の存在意義というのは、太古からの人間の普遍的な体験を言葉で表現するところにある。」

「詩人は彼個人の哀しみや歓びを、それが人間的普遍性をもつような形に凝固させなければならない。詩人の魂には、その民族、その宗教、いえ、全人類の集会的記憶が蓄えられている。」（トマス・インモース上智大学名誉教授・故人・神父『深い泉の国「日本」』中公文庫、1999年。解説：鎌田東二）

「詩人というのは、世界への、あるいは世界そのものの希望を見出すことを宿命とする人間の別名である。」（山尾三省【鎌田東二『霊性の文学誌』作品社、2005年】）

「詩人とは人の世に涙あるかぎり、これを変じて白玉の言葉となし、言葉の力をもって神や魔をもよびうる資質のものをいう。」（石牟礼道子「こころ隣にそまる日に」『新版谷中村事件——ある野人の記録・田中正造伝』解題）

4. 萩原朔太郎（1886-1942）と身心変容

『月に吠える』（1917年）

天上総死

遠夜に光る松の葉に、
懺悔の涙したたりて、
遠夜の空にしも白ろき、
天上の松に首をかけ。
天上の松を恋ふるより、
祈れるさまに吊されぬ。

猫

まつくろけの猫が二疋、
なやましいよるの家根のうへで、
ぴんとたてた尻尾のさきから、
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。
『おわあ、こんばんは』
『おわあ、こんばんは』
『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』
『おわああ、ここの家の主人は病気です』

地面の底の病気の顔

地面の底に顔があらはれ、
さみしい病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萌えそめ、
鼠の巣が萌えそめ、

巢にこんがらかつてゐる、
かずしれぬ髪の毛がふるえ出し、
冬至のころの、
さびしい病気の地面から、
ほそい青竹の根が生えそめ、
生えそめ、
それがじつにあはれふかくみえ、
けぶれるごとくに視え、
じつに、じつに、あはれふかげに視え。

地面の底のくらやみに、
さみしい病人の顔があらはれ。

輪廻と転生（『青猫』）

地獄の鬼がまはす車のやうに
冬の日はごろごろとさびしくまはつて
輪の小鳥は砂原のかげに死んでしまった。
ああ こんな陰鬱な季節がつづくあひだ
私は幻の駱駝にのつて
ふらふらとかなしげな旅行にしようとする。
どこにこんな荒寥の地方があるのだらう
年をとつた乞食の群は
いくたりとなく隊列のあとをすぎさつてゆき
秃鷹の屍肉にむらがるやうに
きたない小蟲が焼地の穢土にむらがつてゐる。
なんといふいたましい風物だらう
どこにもくびのながい花が咲いて
それがゆらゆらと動いてゐるのだ
考へることもない かうして暮れ方がちかづくのだらう
戀や孤獨やの一生から
はりあひのない心像も消えてしまつて ほのかに幽霊の
やうに見えるばかりだ。
どこを風見の鶏が見てゐるのか
冬の日のごろごろと廻る瘠地の丘で もろこしの葉が吹
かれてゐる。

遺傳（『青猫』）

人家は地面にへたばつて
おほきな蜘蛛のやうに眠つてゐる。
さびしいまつ暗な自然の中で

動物は恐れにふるへ

なにかの夢魔におびやかされ

かなしく青ざめて吠えてみます。

のをある とをある やわあ

もろこしの葉は風に吹かれて

さわさわと闇に鳴つてる。

お聴き！ しづかにして

道路の向うで吠えてゐる

あれは犬の遠吠だよ。

のをある とをある やわあ

「犬は病んでゐるの？ お母あさん。」

「いいえ子供

犬は飢ゑてゐるのです。」

5、宮澤賢治 (1896 - 1933)

永訣の朝

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつそう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い^{じゆんさい}蓴菜のもやうのついた

これらふたつのかけた陶碗に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたもち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらぼうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまこころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんななどに聖い資糧をもたらすやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

(1922年11月27日)

松の針

さつきのみぞれをとつてきた

あのきれいな松のえだだよ

おお おまへはまるでとびつくやうに

そのみどりの葉にあつい頬をあてる

そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは
どんなにわたくしたちをおどろかすことか
そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにねつに燃され
あせやいたみでもだえてあるとき
わたくしは日のてる所でたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてみた

（ああいい さつぱりした
まるで林のながさ来たよだ）

鳥のやうに栗鼠りすのやうに
おまへは林をしたつてみた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言ってくれ
おまへの頬の けれども
なんといふけふのうつくしさよ
わたくしは緑のかやのうへにも
この新鮮な松のえだをおかう
いまに雫もおちるだらうし
そら
さはやかな
ターペンティン
terpentineの匂もするだらう（1922年11月27日）

無声慟哭

こんなにみんなにみまもられながら
おまへはまだここであるしかなければならないか
ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ
また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてあるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが
あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や蛍光菌のくらしい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ
（おら おかないふうしてらべ）

何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら
またわたくしのどんなちひさな表情も
けつして見遁さないやうにしながら
おまへはけなげに母に訊くのだ
（うんにや ずゐぶん立派だぢやい
けふはほんとに立派だぢやい）
ほんたうにさうだ
髪だつていつそうくろいし
まるでこどもの苹果の頬だ
どうかきれいな頬をして
あたらしく天にうまれてくれ
（それでもからだくさえがべ？）
（うんにや いつかう）
ほんたうにそんなことはない
かへつてここはなつのはらの
ちひさな白い花の匂でいつぱいだから
ただわたくしはそれをいま言へないのだ
（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは
わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ
ああそんなに
かなしく眼をそらしてはいけない（1922年11月27日）

青森挽歌（前半部・中間部略）

（わたくしがいまごろこんなものを感じることが
いつたいほんたうのことだらうか
わたくしといふものがこんなものをみることは
いつたいありうることだらうか
そしてほんたうにみてゐるのだ）と
斯ういつてひとりなげくかもしれない……
わたくしのこんなさびしい考は
みんなよるのためにできるのだ
夜があけて海岸へかかるなら
そして波がきらきら光るなら
なにもかもみんないいかもしれない
けれどもとし子の死んだことならば
いまわたくしがそれを夢でないと考へて
あたらしくぎくつとしなければならぬほどの
あんまりひどいげんじつなのだ
感ずることのあまり新鮮にすぎるとき

それをがいねん化することは
きちがひにならないための
生物体の一つの自衛作用だけれども
いつでもまもつてばかりゐてはいけない
ほんたうにあいつはここの感官をうしなつたのち
あらたにどんなからだを得
どんな感官をかんじただらう
なんべんこれのかんがへたことか
むかしからの多数の実験から
倶舎がさつきのやうに云ふのだ
二度とこれをくり返してはいけない
おもては軟玉と銀のモナド
半月の噴いた瓦斯でいつばいだ
巻積雲のはらわたまで
月のあかりはしみわたり
それはあやしい蛍光板になつて
いよいよあやしい苹果の匂を発散し
なめらかにつめたい窓硝子さへ越えてくる
青森だからといふのではなく
大てい月がこんなやうな暁ちかく
巻積雲にはひるとき……
 《おいおい あ顔いろは少し青かつたよ》
だまつてゐる
おれのいもうとの死顔が
まつ青だらうが黒からうが
きさまにどう斯う云はれるか
あいつはどこへ墮ちようと
もう無上道に属してゐる
力にみちてそこを進むものは
どの空間にでも勇んでとびこんで行くのだ
ぢきもう東の鋼もひかる
ほんたうにけふの……きのふのひるまなら
おれたちはあの重い赤いポムプを……
 《もひとつきかせてあげよう
 ね じつさいね
 あのときの眼は白かつたよ
 すぐ瞑りかねてゐたよ》
まだいつてゐるのか
もうぢきよるはあけるのに
すべてあるがごとくにあり

かゞやくごとくにかがやくもの
おまへの武器やあらゆるものは
おまへにくらくおそろしく
まことはたのしくあかるいのだ
 《みんなむかしからのきやうだいなのだから
 けつしてひとりをいのつてはいけない》
ああ わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます(1923年8月1日)

東岩手火山

月は水銀、後夜の喪主
火山礫は夜の沈澱
火口の巨きなめぐりを見ては
たれもみんな愕くはづだ
 (風としづけさ)
いま漂着する薬師外輪山
頂上の石標もある
 (月光は水銀、月光は水銀)
《こんなことはじつにまれです
向ふの黒い山……つて、それですか
それはこのつづきです
ここのつづきの外輪山です
あすこのてつぺんが絶頂です
向ふの？
向ふのは御室火口です
これから外輪山をめぐるのですけれども
いまはまだなんにも見えませんから
もすこし明るくなつてからにしませう
えゝ 太陽が出なくても
あかるくなつて
西岩手火山のはうの火口湖やなにか
見えるやうにさへなればいいんです
お日さまはあすこらへんで拝みます》
黒い絶頂の右肩と
そのときのまつ赤な太陽
わたくしは見てゐる
あんまり真赤な幻想の太陽だ

《いまなん時です
三時四十分？
ちやうど一時間
いや四十分ありますから
寒いひとは提灯でも持つて
この岩のかげに居てください》
あぁ、暗い雲の海だ
《向ふの黒いのはたしかに早池峰です
線になつて浮きあがつてるのは北上山地です
うしろ？
あれですか、
あれは雲です、柔らかさうですね、
雲が駒ヶ岳に被さつたのです
水蒸気を含んだ風が
駒ヶ岳にぶつつかつて
上にあがり、
あんなに雲になつたのです。
鳥海山は見えないやうです、
けれども
夜が明けたら見えるかもしれませんよ》
(柔かな雲の波だ
あんな大きなうねりなら
月光会社の五千噸の汽船も
動揺を感じはしないだらう
その質は
蛋白石、glass-wool
あるひは水酸化礬土の沈澱)
《じつさいこんなことは稀なのです
わたくしはもう十何べんも来てゐますが
こんなにしづかで
そして暖かなことはなかつたのです
麓の谷の底よりも
さつきの九合の小屋よりも
却つて暖かなくらゐです
今夜のやうなしづかな晩は
つめたい空気は下へ沈んで
霜さへ降らせ
暖い空気は
上に浮んで来るのです
これが気温の逆転です》

御室火口の盛りあがりには
月のあかりに照らされてゐるのか
それともおれたちの提灯のあかりか
提灯だといふのは勿体ない
ひわいろで暗い
《それではもう四十分ばかり
寄り合つて待つておいでなさい
さうさう、北はこつちです
北斗七星は
いま山の下の方に落ちてゐますが
北斗星はあれです
それは小熊座といふ
あの七つの中なのです
それから向ふに
縦に三つならんだ星が見えませう
下には斜めに房が下つたやうになり
右と左には
赤と青と大きな星がありませう
あれはオリオンです、オライオンです
あの房の下のあたりに
星雲があるといふのです
いま見えません
その下のは大犬のアルファ
冬の晚いちばん光つて目立つやつです
夏の蝸とうら表です
さあみなさん、ご勝手におあるきなさい
向ふの白いのですか
雪ぢやありません
けれども行つてごらんさい
まだ一時間もありますから
私もスケツチをとります》
はてな、わたくしの帳面の
書いた分がたつた三枚になつてゐる
事によると月光のいたづらだ
藤原が提灯を見せてゐる
ああ頁が折れ込んだのだ
さあでは私はひとり行かう
外輪山の自然な美しい歩道の上を
月の半分は赤銅、地球照
《お月さまには黒い処もある》

《後藤又兵衛いっつも拝んだづなす》
私のひとりごとの反響に
小田島治衛が云つてゐる
《山中鹿之助だらう》
もうかまはない、歩いていゝ
どつちにしてもそれは善いことだ
二十五日の月のあかりに照らされて
薬師火口の外輪山をあるくとき
わたくしは地球の華族である
蛋白石の雲は遙にたゞへ
オリオン、金牛、もろもろの星座
澄み切り澄みわたつて
瞬きさへもすくなく
わたくしの額の上にかがやき
さうだ、オリオンの右肩から
ほんたうに鋼青の壮麗が
ふるえて私にやつて来る
三つの提灯は夢の火口原の
白いとこまで降りてゐる
《雪ですか、雪ぢやないでせう》
困つたやうに返事してゐるのは
雪でなく、仙人掌のくさむらなのだ
さうでなければ高陵土
残りの一つの提灯は
一升のところに停つてゐる
それはきつと河村慶助が
外套の袖にぼんやり手を引つ込めてゐる
《御室の方の火口へでもお入りなさい
噴火口へでも入つてごらんなさい
硫黄のつぶは拾へないでせうが》
斯んなによく声のとゞくのは
メガホーンもしかけてあるのだ
しばらく躊躇してゐるやうだ
《先生 中さ入つてもいがべすか》
《えゝ おはいいりなさい 大丈夫です》
提灯が三つ沈んでしまふ
そのでこぼこのまつ黒の線
すこしのかなしさ
けれどもこれはいつたいなんといふいゝことだ

大きな帽子をかぶり
ちぎれた朱子のマントを着て
薬師火口の外輪山の
しづかな月明を行くといふのは
この石標は
下向の道と書いてあるにさういない
火口のなかから提灯が出て来た
宮沢の声もきこえる
雲の海のはてはだんだん平らになる
それは一つの雲平線をつくるのだ
雲平線をつくるのだといふのは
月のひかりのひだりから
みぎへすばやく擦過した
一つの夜の幻覚だ
いま火口原の中に
一点しろく光るもの
わたくしを呼んでゐる呼んでゐるのか
私は気圏オペラの役者です
鉛筆のさやは光り
速かに指の黒い影はうごき
唇を円くして立つてゐる私は
たしかに気圏オペラの役者です
また月光と火山塊のかけ
向ふの黒い巨きな壁は
熔岩か集塊岩、力強い肩だ
とにかく夜があけてお鉢廻りのときは
あすこからこつちへ出て来るのだ
なまぬるい風だ
これが気温の逆転だ
(つかれてゐるな、
わたしはやつぱり睡いのだ)
火山弾には黒い影
その妙好の火口丘には
幾条かの軌道のあと
鳥の声！
鳥の声！
海拔六千八百尺の
月明をかける鳥の声、
鳥はいよいよしつかりとなき

私はゆつくりと踏み
月はいま二つに見える
やつぱり疲れからの乱視なのだ

かすかに光る火山塊の一つの面
オリオンは幻怪
月のまはりは熟した瑪瑙と葡萄
あくびと月光の動転

(あんまりはねあるぐなぢやい)

^{うな}
汝ひとりだらいがべあ
^{わらしやど}
子供等も連れでて目にあへば
^{うな}
汝ひとりであすまないんだぢやい)

^{くわこうきう}
火口丘の上には天の川の小さな爆発
みんなのデカンシヨの声も聞える
月のその銀の角のはじが
潰れてすこし円くなる
天の海とオーパルの雲
あたたかい空気は
ふつと^{より}燃になつて飛ばされて来る
きつと屈折率も低く
^{しよたうやうえき}
濃い蔗糖溶液に
また水を加へたやうなのだらう
東は淀み
提灯はもとの火口の上に立つ
また口笛を吹いてゐる
わたくしも戻る
わたくしの影を見たのか提灯も戻る

(その影は鉄いろの背景の

ひとりの修羅に見える筈だ)

さう考へたのは間違ひらしい
とにかくあくびと影ぼうし
空のあの辺の星は微かな散点
すなはち空の模様がちがつてゐる
そして今度は月が^{ちぢ}甕まる

6. 鎌田東二(1951-)

①「時じくのかくの突」(『常世の時軸』思潮社, 2018年7月17日)

時の断片 1

身に着けているのは機械それも話。行方知れずの未来。理科室の実験台の上で少年は突然涙を零した。世界がこのようにあることの不思議と必然に突如目覚めたのだ。春が来ていたが帰り

が遅くなるからといって洞窟に戻っていった。帰るところなんてどこにもないのに。広場の淵から聖歌隊が奈落に向かって歌いながら墜ちて行ったハレルヤハレルーヤと歌いながら。こうして細胞にひとつの昏い種子情報を閉じ込めた。天国は近い。すべてがつながりながら変容している妙趣不可思議。過去未然形未来過去形現在終身刑。細胞核から飛び出した電子端末に鑰を渡して蓋をした。秘蔵宝鑰。港に玉声を注ぎ込みながら星を筆り取ってロ一杯に頬張った。世界は流通の渦。睡眠の暁から地平線の闇が溶融する天使の羽を持っていたサイボーグ少女。往けるところまで往ってみようと手をつないで天の浮橋から身を投げた。身に付けているのは機会それも斬。行方不明の魂。

時の断片 2

イタコは発光色の柱廊となって天空に手を差し伸べた。宇曾利湖の水が竜巻と化し緑星に吸い込まれてゆくこの世ならざる光景を一緒に視ていた。どこまで往けば地獄に行き着くのか。鋭い突起に刻印された岩石の門を三日月が滑り墜ちてゆく。砂と水に記された記憶をほどいてゆく指はない。救いを必要としているのは羯磨だったのに。けれどいつだって救われてあったのに。日が昇るまでの時の距離を忘れ果てて眠れぬ夜を過ごした。忘れようとしても思い出せない苦しみが地下水に染みて星の雫となる。涙だって渴き果てたのに。天を瞞める眼が揺らいでいる。光はどこまで屈折しても光。記憶を距離で割って時の欠片を飲む。イタコの星は今宵も切なく光る。死者はみな流星となって無方の彼方へ飛び去っていった。後に残されたいのちあるものの生の澱みを呑み込んでふくよかに笑う者。さようなら愛しの君よ。

時の断片 3

夢が崩れてゆく雲の峰から大鷲は飛来した。世界の暁を告げる鐘は震魂のコードを食いちぎって逃げた。何処へ往くのかエクソダス。見えるものだけを信じるのではないと誓ったはずだ。行方を知らずベルは死者の手の中で凍えている。愛していると言ってほしかったんだ。心からそれを待ち望んでいたのに。見えるものだけを信じているわけではないと流星は言った。風雅はかぐや姫からサタンまでを包み込んで融ける。見上げる虹の中のフルムーン。思い出は突如雷鳴となって天空を切り抜く。人混みの中に逃げていく犯人はどのようにしても逃れられない神の手に後ろ髪を掴まれてもがく。魚眼の奥からマゼラン星雲が広がる。息もできないほど天悉のことを愛していた。誰にも知られずに去っていった魚の鱗の孤独。死の国が遠くにあると思っていた日々がこれほど遠く感じられるとは。思い出だけ

が地上界の恩寵であったのに。すべてはこの世ならざるものの
顕現。欠魂のマニフェストを怖れるな。死者だけが見えないわ
けではないのだ。何処までも遠くまで往こうと走りつづけてい
る丹塗り矢の君。大鷲は地球のマグマを鋭い嘴で食いちぎった。
夢はすでにもうひとつのこの世なのだ。

時の断片 4

夢に見た井戸の中の死顔はいつか知れず行方不明。飛び出す一
車線の超越を駆け抜ける密儀は崩落した。青空を切り取って啄
んでいる八咫鳥が目指す方向は西方浄土ならぬ砂漠の地。還る
ことができぬ難民の漂流が始まる。けれどどこでだって生きて
いける。生きていればいいのだ。生きてさえいれば夢が現実を
越境して世界を変える。織物のように世界を取り込み息をする。
見つめる瞳が遺灰で白くなるまで時のしるしを読む。巫女は羽
衣を棚引かせつつ旅する。その間廢墟は舌を出して横たわった
まま。水は涸れたが水脈は切れてはいない。雌伏五千年の文明
の逆襲が始まる。至福千年王国は誰の眼にもしかとは見えぬが
遠い未知より悉有を見つめている。

時の断片 5

火入れ式は終わった。地を這う蟻は火の中で蠢き叫んだ。誰が
火を投げ入れたのか。答えはなかった。燃え盛る火の爆ぜる音
と沈黙が地を覆った。なぜ誰も何も答えない。一匹の蟻は火の
中で呼ばわった。火を創った神がいるならば神よ答えよ。汝は
世界を焼き尽くすために火を創ったのか。悉皆焼尽運命に導き
入れるために。存在理由でふ空白。天空に黒龍が満ち隙間から
青空が望み見えたがどんな声もなかった。風が吹き火は燃え続
け黒煙は黙々と蒼穹を焦がすばかり。もはや一匹の蟻の声も聴
こえなくなった。この世界には誰がいるのか何がおるのか神隠
れたるモノよ。

時じくのかくの実 1

探すために生きてきた。森の奥に鳥居があった。死者の身体
は半ば崩れ落ちていた。生きていただけでよかった。風さえ死
に絶えていたから。娘の耳は死者の玄関。大理石は水を飲みな
がら笑った。遠方から死者がきて鏡を置いて行った。日は沈ん
だが黄泉帰らなかつた。誰のために死んだのか。忘れることの
できないミイラ食みは十一日間眠ったままだった。朝水が呼ん
でいた。誰もが死に水と思った。蛇のように地面を這ってきて
口を覆った。天が裂ける地が割れる。振動の波の中で笑いなが
ら死者は眠った。永遠の眠りさようなら遠ざかってゆく風景。
死んでいくということはこのように風に吹かれることだった
のだ。風は忘却の使徒郷愁の導師。風に吹かれながら泣いたた

だ泣いた。

2

話したくても言葉にならなかった。岬の天気はまっすぐに
死んでいた。葬儀は簡単だった。空に向かって指を二本立て
るだけで終わったから。けれど話したくても言葉にならなかつ
た。涙だけが死者の言葉だったのだ。鳥が二羽十文字に飛
び立った。海の彼方から押し寄せるものがあった。少年の自
転車が 45° 傾きながら天に向かって叫んだ。僕を愛してく
れ。波は圧倒的に波だった高く高く。悲劇を救うための鍵は
洞窟の中に贈られてきた。涙だけが死者の合言葉。母の麦藁
帽子を被って丘の上で少しだけ眠った。眠りは洞窟に入る鍵
であり鍵は涙の言葉。僕を愛してくれ。鳥文字を引き裂きな
がら少年は飛んだ高く高く。岬の天気はまっすぐに立ったま
ま死んでいた。文字となった少年を抱いて。葬儀は簡単だつ
た。空に向かって指を二本立てるだけで終わったから。高く
高く。

悲の岬 2

深い夜の瞳の底でアンテナは疼いた。音信絶対不能の音源を逆
探知したが事切れてしまった悲劇的な預言者を弔う。耳孔の奥
でトマトが潰れマグネシウムの閃光が散らばった。神父は手旗
信号を使って必死の面持ちで十字架を切ったが誰も気にせず
通り過ぎた。夜空を染める無関心と迷る涙のような流星。帰っ
て来い。暗号解読が遅れたため避雷針が裂けて砕けた。もう一
歩も先に進めない。三步退いて倒立したまま巫女は緋袴を翻し
て昏睡した。懐かしさこそ誘惑の手口なのに。忘れるな。未来
を覗く窓が指揮棒で割られていた。空に向かって牛乳を撒き散
らした。ハレルヤを叫びながら白色驟雨に撃たれ南十字星に内
臓を鷲掴みされたまま遠くの遠くまで嘆きの河を渡って行く。
その日始祖鳥は翔ぶ空を切なく探した。

②『無痛分娩』(土曜美術社出版販売、2019年7月17日)

夢通分娩 I 1 産母

母さん

ぼくがあなたを産んだ日

あなたはぼくを捨てた

葉脈はどこまでも伸びゆき

血管深く食い込んだ

すぎるような思いで

取りつく島もない岬に乗った

ほら

どこまでも空は青いよ

いつまでも海は青いよ

朽ち果てた回覧板を

遠目の狐が運んでいる

母さん

ぼくがあなたを呼んだ日

あなたはぼくを手放した

臍の緒だけが唯一の通信回路

けれど万能の食連鎖と夢通信

母子は太古の海にたゆたっていた

湧いてくる明日の泡と消えてゆく昨日の木の実

ともに時じくのかくの実を齧って

秘密の奥歯を分け合う

つながる

きれ

つながる

きれ

だが この切り株からしかマゼラン星雲もアンドロメダ星雲も生まれない

遠くは近く

近くは遠い

手の届かないところで一つになっている幸不幸

蒼穹のメビウスを掴んでぼくは母を食い破って出た

どこまでも空は蒼く

いつまでも海は青かった

母さん

ぼくがあなたを産んだ日

あなたはぼくを捨てた

最終詩「ピアニッシモは震えた」

光の海

見下ろして

落ちた

いのちのささやき

いっしゅんいっしゅんになりひびくこえ

とおいかげろうのような

生きてあること

遠くのものに耳かたむけること

死者たちはなげく

聴いてくれ

寄り添い人は全身耳になる

すべての星は全球光になる

すべてのいのちは影になる

ピアニッシモは震えた。指の先に無数の星が降っていた。地面を裂いて雷が大蛇の舌のように天空に延びていった。待っている者は十字路で事切れた。屍体を片付けるために遺族は木に登って天に唾した。死者を悼むために。応えぬモノが時の沖から頭を擡げた。すべてのいのちあるものよ。越えるのだ。超えてゆくの。嘆きの谷を下れ。悲しみの海を渡れ。苦しみの岬から飛べ。飛ぶのだ。恐れるな。鎮魂の石笛が途切れた。どこにも静寂はなかったが沈黙が支配した。世界はこれほど喧騒なのに死んだように声がなかった。死者は甦らない。終わった先に海が開ける。港はある。指先から光が漏れた。ピアニッシモは顫えて瞳を大きく見開いたままゆっくりと身を投げた。

③『狂天動地』(土曜美術社出版販売、2019年9月1日)

1 みなさん天気は死にました

「みなさん 天気は死にました」

と 高校三年生の田村君は 言った
その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物
林檎よ
縁は異なるもの味なもの

そのとおりだが
でもね
死んだ天気も 縁次第
そのようになって そのようにある
あるべくして ある
なるべくして なる

世界はそのようにうごいている
縁はそのようにはたらいっている
1ミリ1センチたりとて恣意的ではない
成るべくして成る
在るべくして在る

ありおりはべりいまそかり
青森カルシウムはどこ行った？

臼田甚五郎は飛びのいた
大森から青森まで
その飛躍こそが猿楽芸能
天狗舞
マイトレーヤ

そは如是我聞
聴くべき耳を研いた
研磨研耳
いかつこなく
いかしまぐはひのごと
弘前に
花折れて立つ

やつかみみ

はしぬれど
ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った
恐山にて
津軽三味線の
音律たかあま
ぐひのみこと

だがされど
されど木島
みやこじま
いつまで封せど
ねこばばの
影落ち延びて
地に臥せり

やつがれは
しとど
ぬれて
大河の一滴まで
のみほした

ぬれおちど
ぶちそいど
れおなると
はれおから
ひとしづく
はれ ほれ
みれ おれ

行き場なし
溜り場なし
咲き場なし
馬場愛なし

そうだとしても
すべてをいれて
すべてをすてて
本日早々

みなさん 天気は 死にました。

驚天動心 2 噴火

明治維新から百年の節目の年になる一九六八年の三月、四国を横断し、九州に渡った。十七歳の高校二年が終わる頃、変速ギアなしのママチャリとそうは変わらぬけれども荷台が頑丈な武骨な自転車に乗って、四国東端の小さな町徳島県阿南市桑野町を出発し、二日かけて東の端から西の端まで四国を横断した。そして四国西端の港町八幡浜からフェリーに乗って、明け方、九州の別府に着いた。やまなみハイウェイと呼ばれていた北九州横断道を二日かけて横断し、熊本から南下。骸骨の立つ水俣中学校の理科室に泊めてもらい、さらに川内、桜島を抜けて、垂水小学校の宿直室に泊めてもらった。

翌朝早く垂水小学校を出発して、鹿児島県から宮崎県へと日南海岸を北上した。右手には群青の海。左手の岬の丘の上には真っ黄色の菜の花の群生。空は抜けるように蒼く、吸い込まれて、空の底に墜ちていきそうだった。アップダウンの多い海岸線を尻を上げてふうふう喘ぎながら漕ぎ、サボテン園を超えると、右手前方に小さな緑の島が見えてきた。

エメラルドグリーン宝石の海が指の上で光っている。そんな風を感じて、何気なしにふとその思い立って青島に立ち寄った。鬼の洗濯岩と呼ばれるギザギザの岩礁の間を抜けて島の中に入っていき途中から猛烈に皮膚が泡立ち、このうえない神聖な感覚に包まれ、島の中央の森の中に入るとその感覚は頂点に達し、夢のような眩暈の中をさ迷った。

この青島体験をピークとする十日ほどの四国九州自転車一人旅を終えて自宅に戻ってすぐ、青島での感動とも異和感ともいえる奇妙な感覚が、まるで火山が噴火口から火山弾を噴き上げるように身心をつらぬいた。気がつくやうに、生まれて初めて自発的に言葉を書きなぐっていた。それは詩のような文章ではあったが、内部感覚では詩以前の何ものか、得体の知れない異物であった。それが言葉の不可思議・妙と出逢った最初の体験となった。

こうして私は言葉の囚われ人となり、天然を喪った。

3 デルフォイの夢

一九八一年八月、デルフォイの神殿に立った。雲一つない抜けるように蒼い空。どこまでもその蒼の中に墜ちていくような。かつて古代ギリシャのアポロン神殿のあったその場所は、

今は神託も信託も託される何ものもなく、真昼間の何一つ翳りもない陽光の中で明るい廃墟であるばかりだった。その昔、アポロン神殿の権威はギリシャ全土に広がり、汝自身を知れの格言が神殿の額に掲げられていたという。今はちらほらと観光客はいたが、それほどの数ではない。強い日差しの中で緩慢に移動する人びと。

地形を見回し、アポロン神殿の脇からパルナツスの山に登った。山頂で誰もいないのを確認して素裸になった。小学五年の時、『古事記』を読み、続けざまにすぐギリシャ神話を読んで以来、ギリシャに憧れていた。そしていつしかギリシャに行ったら、その輝くばかりの陽光の下で真裸になってその光を一身に受けたいと思い続けてきた。三十歳の夏、その子供の頃からの願望を達成した。

素っ裸で祝詞を奏上し、龍笛を奏でた。その時、ダダダダと空が鳴った。ダイナマイトでも仕掛けて山を爆破しているかのような。おそらく観光客相手のリゾートホテルを建てるために山を切り崩しているのだろう。そう思うとむしうにかなしくなった。

たった一人の儀式を終えて、宿の近くのタベルナに入って遅い昼食を摂ろうとした。途端、これまで経験したことのないスコールが襲ってきた。篠突く雨とか、爆弾のような連射砲のような雨雨雨。その時、強烈な閃光が走り、しばらくして物凄い音響がダダダダと空が鳴り響いた。それはカミナリだった。身震いするほどそそけだった。

その夜、夢を見た。泉の前に立っていた。泉から金色の湯煙が立ち上ってくる。そこに近づき、飛び込んでいきたい気持ちがあるのだが、恐れ多いような神々しいような畏怖の念を感じて佇んでいた。その時、金の泉の中から声が聞こえてきた。

「美しいものを美しいものとして見るのではなく、醜いものを醜いものとして見るのでもなく、ただありのままに見つめよ」

そして、予言の言葉が続いた。何処から来て何処へ行くのか。その道筋を示す言葉を得て慄然とし、ありのままに見つめることを座右の銘とするほかなかった。行き先は不明でもその流れに乗るほかなかった。

4 富士の雷 富士の虹

一九八五年八月八日、初めて富士山に登った。前日の深夜、富士宮の富士浅間神社の湧玉ノ池で禊して。富士山麓の地下より流れ来るその水は真夏だというのにヒマラヤの水かと思うほど冷たかった。

富士スバルラインの終点でバスを降り、登っていった。途中、大雨に遭遇。登山者は皆山小屋に避難していた。だが、このままおめおめと引き下がるわけにも小屋に隠れるわけにもいかぬ。木花咲耶姫の本拠だから。

高度三千メートルを超える富士山中の篠突く冷たい雨の中、八合目に近づいた頃、何気なく見上げていた山頂右上付近の雲間に、突如小さな玉のようなものが見えた。何かと思って見つめていると、その光の玉らしきものがぎゅるぎゅると不規則な旋回を始めた。何とも眩暈のような無秩序な動きで、まるで無数の蛇が身を寄せ合って蠢いているような不気味で複雑で雑多な不規則運動であるかのようだった。

と思う間に、光の玉はいきなり猛スピードで山の傾斜を走り下りていった。あつという間の出来事だった。超高速の光の筋。何が何だかわからぬままポカンとしていると、これまで聞いたことのないような大音響で雷鳴が炸裂した。

あれは雷が出現する瞬間だったのか。瞬時に理解し、思わず合掌した。これを見るためにここまで来たのかという思い。木花咲耶姫の花の如き火の如き激しい御在れの瞬間。今ここに木花咲耶がおわします。そんな圧倒的な顕現に震撼する。このままこの雷光に打たれて昇天してもいい。ただただありがたい。そんな心持ちにさせられた。ヌミノーゼ。畏怖と魅惑。何と言ってもいい。ルドルフ・オットーの聖なるものの概念を肌身に実感した。

その夜、ご来光までの時間、富士山頂の山小屋で夜の底を身震いしつづけた。

およそ半年後の一九八六年三月二十日、三十五歳になる誕生日の夜、七面山に登り始めた。登山道は途中から雪道になった。翌春分の日一日だけが四十日間の連続講習期間中の休みだった。魔というほかないモノと遭遇し、どうしようもない混沌と混沌の中で、すがる思いで雪の七面山に登ったのにはわけがあった。

一年に二回、春分の日と秋分の日二回だけ、七面山から真東に聳える富士山頂のど真ん中から朝日が昇ってくるのが見えるのだった。それを拝するためだけに七面山に登拝したのだった。登拝前に、深夜の滝に打たれて身を浄め、気を引き締めしたが、無我夢中で、滝の冷たさも激しさも気にならなかった。

というのも、この四十日近く、一睡もすることができず、気が狂いそうになっていたからだ。その間、自分を制御することも律することもできず、ただ眠れぬ夜、身を横たえたまま朝を

待ち、朝日を拝しつづけた。そして、春分の日、富士山から昇ってくる朝日を拝したいという一念のみで混沌の身を支えた。

その四十日近く前、寝入りばなにバチーンという大音響とともに脳内で光が炸裂し、以来、一睡も眠ることができなくなった。眠りに入る回路が焼き切れ、ショートしてしまった感じだった。その原因ははっきりと自覚していた。魔を警戒し夢を見ることを恐れたのだった。そこで、無意識の内に眠りに入るのを抑えようとする気持ちがあったのだろう、寝入りばなの激烈なる脳内炸裂を誘発したのだった。

人生最大の危機、狂天慟心の身を持って余し、どうすることのできないまま春分の朝を迎えた。

七面山山頂付近に建つ日蓮宗の山岳寺院敬慎院で少し休息した後、外に出て御来光を待った。未だ漆黒の闇の中に富士のシルエットが奥床しくも雄渾にうち沈んでいる。

徐々に東の空が明るんできて、富士の山頂に赤みが差してきた。おそらく日蓮宗か立正佼成会の人たちだろう。法華経如来寿量品を団体で読誦する声が聴こえ、私の上げる大祓祝詞も掻き消された。だが陶酔的な混声合唱の集団祈祷のひとつ時。

ゆっくりと一条の光が差し込み、富士の真っ芯から朝日が顔を覗かせた。銭湯の書き割りの如きいかにもという笑いたくなるようなそして有難い光景。熱くなるものが込み上げたが、それも集団沸騰の中で溶け入った。

御来光を拝した後、七面山の山頂に登った。他には誰も山頂まで登る人はいなかった。ずぶりと膝まで入るほど深い残雪があった。深雪に足を取られ、汗びっしょりになりながら小一時間ほど必死で雪道を辿った。周りの風景を見る余裕もなく、足元ばかりに気を取られ、漸く山頂に至り、顔を上げて目の前を見た。

いきなり正面にドーンと富士が聳え、右上空に朝日が輝いていた。雲一つない快晴。その富士と朝日を取囲むかのように大円周の虹が掛かっているのが見えた。

嘘だろ！ そんなの。

ありかよ、こんなの。

まったく予期しない光景に、瞬間、気が抜けた。

そのとき、怒濤の如く涙があふれた。

たすかった、これでぼくはいきられる。

瞬時にそんな想いが押し寄せて、有難さの滂沱の涙となった。山頂でリュックから取り出した龍笛で「産霊」という曲を吹いた。

その日その時から、ほんのわずかずつ眠れるようになった。

はち切れそうになった風船頭に小さな穴が開いて、風が通るようになったのだ。

ぼくは天然自然に生存を許された。こうして、ふたたび明日を考えることができるようになった。

「働地7 歎きの城」

四方八方の転身

疎開中のマンドリンが鳴いた

ホトトギスさえこれほどはと思うほど

人は皆

各個各心の中に歎きの城を持っている

城主は忙しく出張しているから

家老や門番がせわしく城勤めしているが

時に世話焼き切れず

治外法権

勤務放棄

お手上げとなる

どうか 教えてください

秘密の扉の開け方を

そして 歎きの城を

智恵の蔵とする旅程を示してください

不在の城主に連絡が取れず

苛立ちながら家老は訊いた

とめどなく流される涙

嘆きの声は終わることなく

呻きを押し殺す瞬間

働哭が漏れた

葬儀のさ中

焼香の最中に

妻は悲しみというよりも大地から槍で突き上げられたように

跳び上がった

羯磨は働哭するというを初めて目の当たりにした

子どもの頃

ある冬の朝早く手洗いに立つ時

窓の外に真裸の女が立っていて

畑の大根を抜いてポンポンと投げ捨てていた

そのあまりの無造作に

そのあまりの無防備に

そのあまりの自然さに

信じがたい光景なのに

あまりにも当たり前

その場に居付いていた

不可思議極まりない超現実的場面なのに

当然というほどのクリアーさ

美しくたうつくしく

息する間もなく見つづけた

母と同級生の隣家の女は

その後精神病院に運ばれて死んだ

忘れられない

そのひとを

悉はあいした

その時と同じ強度で撃ち砕かれた

たましいを射抜かれ

忘れることができないまま

古希を迎えて死者を待つ

不在の城主は

行方不明の名札を置いて

しろがね行きの舟に乗って

消息を絶った

交信は途絶えたが

記憶は残る

記録も残る

傷口も残る

どうか教えてください

秘密の扉の開け方を

歎きの城を焚き上げて
是空の風とする魔法をお示してください

海風の中
マンドリンがひとりでに鳴った

立ち上がるオルフェウス
冥界下りのスサノヲととも

15 メコン

メコン
棚の上の骨壺を抱いて
夕焼けの散華の海に入る

人知れず葬りの蛾
矢板の上に意気消沈した雪だるまが
悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ
誰にも見られず
何人にも咎められず
靴下を履いたまま飛び込んだ
おまえの胸に
メコンよ

防ぎようもない空と
喘ぎ見るばかりの
おまえの喉元
ぬめりと流れてゆく舌先を
衝立は途絶えた

メコンよ
何というなつかしさの奥に
蜜蜂がつつき合って
互いを刺し殺す現場を
生まれたばかりの
二日月の生卵
割れぬまま呑み込んだ
おまえの度量

いくばかり
いかばかりかと
捨て石に訊く
死後の生存を

名ばかりの孤独に
唯名論者は躓く
明日を信じないくせに
明日を待ち望む偽善者よ
サンクトペテルブルグまで
日傘をさして
揺籃の扉
消え果てし秀妻
海鮮問屋の蛸と消ゆ
うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて
おまえのまたを
ちのはてまでつづく
あめのやちまた

だが ちまたには季節外れの雪が降っていた
熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも
狂天慟地の凧上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても
あめつちをつなぐ母なる河として
あなたは 流れつづける
この世の果てまで
地の涯てまでも

7、まとめ

- ①詩歌謡は身心変容技法として機能する。
- ②うたは悲しみを受けとめ生きる力となる。悲嘆は歌によって喚起され鎮められ受け入れられる。悲しみは息とし生けるものの歌となつてうたわれる。浄化と悲傷と解放としての詩歌謡。
- ③詩は言葉のバク転・バク宙であり、祈りと意味の空と転移と覚也。